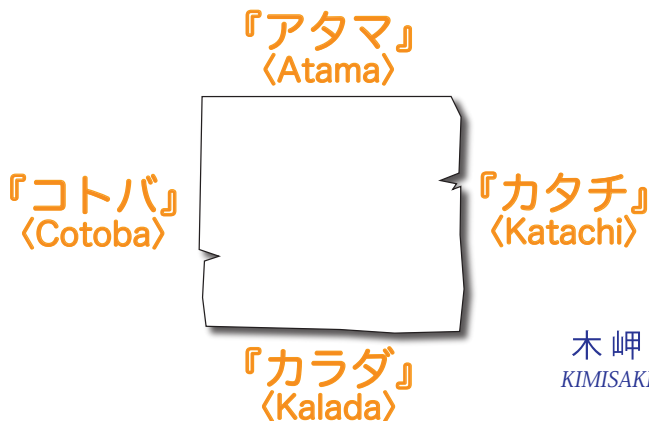


7 THE 7 FRAMES FOR ALL LIFE 7つのワクワク枠 となりのコンパス①

第1フレーム



木岬 さんぽ
KIMISAKI SAMPO

宝探しに でかけよう！

愛犬ランプベリー、おじいさん…とふれあう
少年期さんぽのフルーツフル成長物語

SAMPO FRUITS



となりのコンパス①

『カタチ コトバ カラダ アタマ』

プロローグ

0

「少年よ——」

「ん？」

「フレーム・フォー・オール・ライフを知っておるじゃろうか？」

「——フレーム…」

「フレーム・フォー・オール・ライフ—— フレー！ フレー！ フレー、あるいは、ワクワク粋とも呼ばれておる」

「ううん、知らないよ。——それは、いったい何なの？」

「フレーム・フォー・オール・ライフは、すべてのライフのためになる粋じゃ。この中のライフには、人生はもちろん、生活、生命、いのち、生きること… も含まれる」

「すべてのライフって、生まれてから死ぬまでの、だれかの一生のこと？」

「その意味もあるが、みんなのライフの意味でもある。おまえさんからやわしを含むみんなのライフ——」

「じゃから、このフレームは、少なくとも、今、地球上のすべてのライフのためにもなる」

「——」

「——このフレーム・フォー・オール・ライフが具体的に何なのか、聞いてみたいと思わないかい？」

「——」

「少しは、聞いてみたいと思うじゃろう——」

「——。 ——。 ——」 ……

ニコリ心笑むおじいさん。「そうか——」 おじいさんは、軽くうなずくと、ゆっくりと立ち上がった。「——うむ。では、わしは、帰るとするかの。

——じゃあ、達者でな」

おじいさんは、やわらかな笑みを浮かべながら、上に向けた親指を前後に動かして振り返ったと思うと、ゆっくり歩き始めた。

——ああ、行ってしまおう。

おじいさんの後ろ姿は、だんだん小さくなり—— ついに見えなくなった。

それまでのいきさつが、しばらく映画のように頭の中を流れた。

音楽——テーマ曲イン
♪ハーモニー Harmony
タイトル流れて。
——音楽フェード・アウト

1

その出会いは、とても不思議だった。

中学に入って初めての初夏—— そのままのきっかけは、“それ”
を海辺の砂浜で見つけたことだ。

——ん？ 何だろう？

キラリと輝く何かがある砂浜の上に見えた。

近づいてみると、流れ着いたであろう1本のビンだった。

その中には、紙が折りたたんで入っていた。

——手紙？

それをビンの中から取り出して広げてみると、そこには地元の
地図が描かれていた。よく見ると、岬の先端近くに○印があった。

——宝の地図？

一緒に連れて来ていた愛犬のランプベリーが、しっぽを勢いよく
振っていた——。

まもなく、それが“宝の地図”であると確信した僕は、決めたん
だ。

うん。

ランプベリーの散歩もかねて——

宝探しに出かけよう！

ここから、そのすべてが始まったんだ。

音楽イン ♪夏 Summer 2 に続く

2

急いで帰宅した僕は、大きなシャベルを手にとると、さっそく
ランプベリーと一緒に出発した。

目標ポイントにたどり着くためには、予想外に、急な坂を上らな
ければならなくて——

「ハア、ハア、ハア……」

坂を上り終えたとき、僕の息は乱れきっていた。

——前方を見やると、下り勾配の先にキラリと輝く何かがあるこ
とに気づいた。

音楽フェード・アウト ♪夏 Summer

——お！？

全身に力がみなぎった。

あれは、きっと、探し求めた宝物だ！

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky 途中から

シャベルを強く握りしめると、顔をほころばせながらランプベ
リーとともに勢いよく坂を駆け下りた。

よっしゃあ！

音楽 ♪ Soaring Up Into The Sky 3 に続く

3

そのキラリに近づくとつれ、少しずつスピードを緩めた。
そばに立ち止まってキラリを見ると、それは、丸い石だった。
さっそく、その石に手を伸ばそうとしたとき、自分の目を疑った。
——え!?

なんと、すぐそばに、人が横たわっていたのだ。

な、なんで、こんなところに人が!?

音楽フェード・アウト ♪ Soaring Up Into The Sky

見るからに日焼けしている見ず知らずのおじいさんが、つばの広い帽子を、深くかぶりながら横になっている——。

このとき、その丸い石のことに気をかける以前に、コワイ疑問が心に浮かんだ。

生きているのか!? それとも……

よく観察すると、おじいさんのお腹が、ゆったりと上下しているのがわかった。

とっさに頭の中で考えた。

——うん。“さわらぬ神に、たたりになし”だ。

さっさと、この場から立ち去ろう。

——行くよ、ランプベリー。

ランプベリーの方へ振り向いた僕は、目を大きく見開いた。

ギョ!?

ランプベリーが、おじいさんの顔をペロペロとなめていたのだ。

帽子をずり動かしながら——

こらあ! ダメだ! 心の中で叫びながら、ひもを引っばった。

ランプベリーも負けじとばかりに、ふんばった。

お互い譲り合わずにいると——

ムクッと、そのおじいさんが動き始めた。

!!! ——言葉にならなかった。

ドキドキドキ……

おじいさんは、ゆっくり上半身を起こし、帽子をかぶり直した。

かと思うと、口を開いた。

「何しておる?」

ドキドキドキ……

「あ、ハイ。ぼ、僕は—— た、たか、た、退屈だったから?

——う、ランプベリーの散歩?」 ドキドキドキ……

とっさに“宝の地図”のことは、秘密にした。

「ほう、そうか」

「ところで、その丸い石は、何ですか?」 思いきって尋ねてみた。

「こいつは、わしにとっての大切な宝物じゃ」

「きつと、何か、すごい秘密が隠されているのですね?」

「秘密? そんなふうには、考えたことなかったなあ。」

ただの石ころ、なんの愛哲もない1つの石、a stone、Ein Stein
じゃと思っておった」

「——」

「ただ—— わしの大好きな人からのプレゼントじゃったから、大

切^{せつ}にしておる。お守^{おま}りのような存在^{そんざい}でもある」

「——どうして、ここに置^おいているのですか？」

「わしに、もしものことがあったとき、この丸^{まる}い石^{いし}が近^{ちか}くにあれば—— 今^{こん}度は、この石^{いし}に氣^きづいてくれた誰^{だれ}かが、この石^{いし}を大事^{だいじ}にしてくれるじゃろうと思^{おも}ったからじゃ」

「——」 ……

4

「ところで、それは、何^いじゃ？」 そう言^いいながら、おじいさんは、僕^{ぼく}が持^もっていたシャベルに目^めをやった。

それを、さっと自分^{じぶん}のお尻^{しり}の後^{うし}ろまで移動^{いどう}させた。

「ああ、これは、ヒマだったから——、ちよつくら穴^{あな}でも掘^ほってやろうかなと、——思^{おも}って？」 もう、めちやくちや——

「ほう」

「——」 ……

——海^{うみ}のはるか遠^{とお}くをしばらく眺^{なが}めていたおじいさんは、ふいに、しゃべり始^{はじ}めた。

「おまえさん、『ルモウネのジュモン』を知^しっておるじゃろうか？」

「え？ ——し、知らないよ」 まずい。このおじいさん、明^{あき}らかにあやしすぎる。この場^ばから、さっさと逃^にげなくては。

「——ん？ どうした？」

「ん？ いや、別^{べつ}に」

「では、さっそく行くぞ？」

「——」 ——え！？ もう来^くるの？

「ルモウネ、ルモウネ…」 おじいさんは、何^{なに}やら唱^{とな}え始^{はじ}めたんだ。明^{あき}らかにまずすぎる。

ああ、緊張^{きんちよう}しすぎている。

なんだか足^{あし}が動^{うご}かない。

たかな 高鳴^{こうな}る鼓動^{こどう}。

ふ 吹き出^{あせ}る汗^{あせ}。

いま 今^{いま}にも息^{いき}が止^とまりそうな感^{かん}じ。

ぜんしん 全身^{ぜんしん}の筋^{きん}肉^{にく}がこわばる感^{かん}じ。

…

「ルモウネ、ルモウネ… ああ、効^きいている」

「——」 ——もう効^きいている！？

「ああ、もうダメだ」

おじいさんの様^{よう}子^すをじっと見^みた。

「——」 ——え！？ 何^{なに}がもうダメなの？

おじいさんは、ゆつくり姿^し勢^{せい}を変^かえ始^{はじ}め、——ん？

かんぜん 完全^{かんぜん}に横^{よこ}になった。 ——んん！？

なんだなんだ？ 何^{なに}がどうして、どうなったんだ？

「じゃ、お休^{やす}み」

「へ？」

それから、おじいさんは、まぶたを閉^とじた。

見^みると、ランプペリーも、すでにまぶたを閉^とじて眠^{ねむ}っていた。

ルモウネ、ルモウネ…ル、モウネル、モウネル、

——モウネル！？ もしかして、“もう寝^ねる”ってこと？

5

こんなことがあっていいのか！？
むちゃくちゃ、くだらなすぎるぞ。
あんなに、びびって損したぞ。・・・

モンモンとしながら、おじいさんとランプベリーから少し離れた場所に腰を下ろした。

遠くに水平線が広がっているのが見えた。

青空と海の広がりが彩る、あわいグラデーション——

水平線が描く、ゆるやかな弧——

はらかな海面上に点在し、うすい影を映す白い雲々——

汗ばんでいた肌を気持ちよく、なでる海からの涼しい潮風——

ああ、気持ちいいや。

——自然は、やっぱりすごいや。

心地よい呼吸を、心ゆくまで繰り返した。

再び地図を広げて見ると——

驚くべきことに、地図の上の○印は、おじいさんが昼寝している場所とピッタリ一致していたんだ。

——なぜ！？

6

意を決して、おじいさんが昼寝している場所に再びアクセスし、話しかけてみた。

「——おじいちゃん？」

「——」 何の反応もなかった。

「——おじいちゃん、そろそろ起きていただけませんか？」

「——」 やはり、何の反応もなかった。

「——おじいちゃん！？」 声を大きくしてみた。

「——」 うんともすんとも言わないおじいさん。見ると、お腹の上下運動が、はっきり認められないことに気づいた。

「おじいちゃん！？」 思わず駆け寄ると、おじいさんの体を揺り動かした。

「——。——あ？」 おじいさんは、ゆっくり目を開けた。

「ふうー。驚かさないでくれよ」と僕。

「——ん？ なんじゃ？」

「あれ、す、すみませんが—— そこを、ど、移動していただけないでしょうか？ ——お願いします」 思わず両手を合わせた。

「あっ？ 今は、イヤじゃ。——もう少ししたらのお」

「——はい」 ——もう少し？

7

どれくらいの時間が経ったのだろうか？

もうあきらめて帰ろうとしかけた頃、おじいさんは、ふと身をおこし始め、そのままゆっくりと立ち上がった。

——ん！？ 思わず身構える僕。

しかし、そんな僕を気にも留めずに——

「ああ、よく寝た。腹も、ほどよく減っているし」

おじいさんは、丸い石をポットに入れると、上に向けた親指を前後に動かすしぐさをしながら、頭を少し片方に傾けた状態で僕に向けて心笑みかけてから、そのまま歩き去った。

なんだ？ なんだ？ …… ——応援してくれているの？

8

ともかくにも、それから、穴掘りに燃えたんだ。

音楽イン ♪ Reconstruction

でも、たとえ穴が僕の体をまるまる隠すくらいにまでなったとしても、宝物が見つかる気配は全くなかった。

目覚めたランプベリーは、ただ、身をかがめて穴をのぞき込んでいるだけだった。

「おーい、少年よ～。夕陽に染まる景色がきれいじゃぞお～」

少し離れた場所から、おじいさんの声が聞こえてきた。

「——」 相手にせず、ガシガシとシャベルを動かし続ける僕。

「よかったら、こっち来て—— 一緒に、摘みたての、いちごでも食わんかあ～？」

「——」 なんて、よりによって——。女子じゃあるまいし。

グウー… お腹が鳴った。

… ————なんの、なんの！

そのまま掘り続けた。

「もう、そのへんでやめんと、地上に戻れなくなるぞお～」

「——」 ——んなわけないじゃん。

掘り続けた。

でも、そのあとも、何の成果も生まれなかった。

「——」 ああ、なんだか、むなしくなってきたかも——。

… ————なんの、なんの！

掘り続けた。

「——」 お腹減りすぎて、力が入らなくなってきたかも——。

… ————なんの、なんの！

掘り続けた。

「その調子で掘っていても—— 宝物は見つからんのじゃなかろうかあ～？」

「——」 シャベルの動きをピタッと止めた。

音楽も急停止 ♪ Reconstruction

9

夕陽が海をキラキラと輝かせていた。

腰を下ろしながら、黙々と、勢いよく、いちごをほおぼっている僕と、分けてもらったいちごを、シッポを振りながら器用に食べているランプペリー——。

「——」 うめえ～！

「——そんなに、宝物が欲しかったんか？」とおじいさん。

口の中いっぱいの一ちごを味わいつくして、ほとんどすべてを飲み込んだ僕は、ようやく口を開いた。

「このいちご、すっげえ、うまいよ。

こんなにおいしい、いちご、生まれて初めてかも。

——ああ、生き返る～！」 そう言って、さらにいちごをほおぼる僕。

「——。そうか—— 宝物を、そんなに——」

「——というか、どうして宝物のことを知っていたのですか？」 口の中のいちごを味わいながら、僕は尋ねた。

「——知らなかった。当てずっぽうで言ってみただけじゃった」

・・・ 「——でも、“その調子じゃ宝物が見つからない” って」

「——ん？」

「じゃあ、どんな調子だったら——」

「——はて、どんな調子だったら見つかるんじやろうかのお」

それから、やっと、“宝の地図”のことを、おじいさんに打ち明けようと決めたんだ。

10

「これが、その宝の地図だよ」僕は、それをおじいさんに見せた。

「お!？」 おじいさんは、そのとき明らかに驚きの声を上げた。

「——」

「——おまえさん、これ、どうしたんじゃ？」

「近くの海の砂浜で拾ったんです。ビンの中に折りたたんで入っていて——」

「ほう、そうか——」

おじいさんは、そう言いながら地図を受け取ると——何も話さず、しばらく地図をじっと眺めた。

そうして、おじいさんは、僕に地図を返すと、おもむろに口を開いたんだっけ——。

「少年よ——」

「ん？」

「フレーム・フォー・オール・ライフを知っておるじやろうか？」

「——フレーム……」

「フレーム・フォー・オール・ライフ—— フレー！ フレー！ フレーム、あるいは、ワクワク枠とも呼ばれておる」

「ううん、知らないよ。——それは、いったい何なの？」

「フレーム・フォー・オール・ライフは、すべてのライフのためになる枠じゃ。この中のライフには、人生はもちろん、生活、生命、いのち、生きること… も含まれる」

「すべてのライフって、生まれてから死ぬまでの、だれかの一生の

こと？」

「その意味もあるが、みんなのライフの意味もある。おまえさんらやわしを含むみんなのライフ——。

じゃから、このフレームは、少なくとも、今、地球上のすべてのライフのためにもなる」

「——」

「——このフレーム・フォー・オール・ライフが具体的に何なのか、聞いてみたいと思わないかい？」

・・・ ——ニッコリ心笑むおじいさん。

上に向けた親指を前後に動かしながら、頭を少し傾けている、おじいさんのやわらかな笑み。

——結局、僕は、おじいさんを走って追いかけることにした。

歩みを止めて、向きを変えるおじいさんに、僕は言った。

「——あの、やっぱり、聞いてみたいです。 ハア、ハア……」

「——ん？ なぜ？」

「——。 ——な、何となく？ ハア、ハア……」

「——うむ、よかろう。 ——では、もう一度、その地図を貸してくれるかい？」

「あ、ハイ」僕は、息を整えながら地図を差し出した。

おじいさんは、受け取った地図をゆっくりと裏返した。

裏は、何も書かれていない白紙だった。

「では、行くぞ？」

「え？ ——さ、さあ来い」

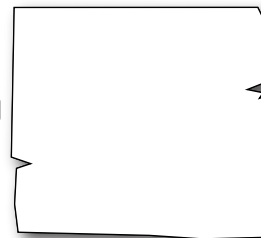
第1フレーム

『アタマ』
〈Atama〉

『コトバ』
〈Cotoba〉

『カタチ』
〈Katachi〉

『カラダ』
〈Kotoba〉



11

「『カタチ コトバ カラダ アタマ』

じゃ^{うら}裏^{ほくし}の白紙^{うえ}の上で、同時^{どうじ}に、4つ^{ほうこう}の方向^{じゆん}を順^{ゆび}に指さすおじいさん。

「——」

「ふつう^ちの地図^ずの枠^{わく}の場合^{ばあい}には、4つ^{ほうこう}の方向^{じゆん}に『東^{とう} 西^{せい} 南^{なん} 北^{ほく}』^くが来る^くじゃ
ろ？」表^{おもて}にした地図^ちの上^ずで、同時^{どうじ}に、
4つ^{ほうこう}の方向^{じゆん}を順^{ゆび}に指さすおじいさん。

「うん」

「すると、このフレーム・フォー・オール・ライフ^{ぼあい}の場合^{ばあい}には、
4つ^{ほうこう}の方向^{じゆん}に『カタチ コトバ カラダ アタマ』^くが来る^くんじや」
再び^{また}、地図^ちを裏返^{うらがえ}した白紙^{ほくし}の上^{うえ}で、同時^{どうじ}に、4つ^{ほうこう}の方向^{じゆん}を順^{ゆび}に指さ
すおじいさん。

音楽イン ♪心地よき日々 Comfortable Days

「——ん？」

「『カタチ コトバ カラダ アタマ』、

『カタチ コトバ カラダ アタマ』、

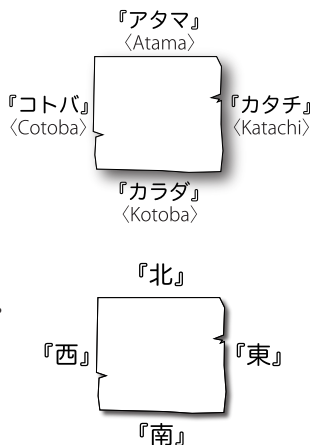
カ、コ、カ、ア、カ、コ、カ、ア——

カッコー、カアー♪ カッコー、カアー♪ 鳴^ないてる～♪

じゃな。アッハッハッ！」

「——」 ……

「まずは—— “ライフの方向^{ほうこう}”^{おも}だと思^{おも}ってみてごらん」



「ホウコウ？」

「そうじゃとも。“方針^{ほうしん}、方角^{ほうかく}、方位^{ほうい}、向き^{むき}…”という意味^{いみ}の“方向^{ほうこう}”。
つまり、“ライフのあり方^{かた}”じゃな」

「ライフのあり方^{かた}——」

「そうじゃ。じゃから、例^{たと}えば、今^{いま}、自分^{じぶん}が、どの方向^{ほうこう}にいるのか、
どの方向^{ほうこう}に向^むかおうとしているのか…などの、さまざまな“ライフ
のあり方^{かた}”を、すべてのライフのための枠^{わく}、フレーム・フォー・オー
ル・ライフは、教^{おし}えてくれるんじや」

「——」

さまざまな“ライフのあり方^{かた}”を
すべてのライフのための枠^{わく}

フレーム・フォー・オール・ライフ
は、教^{おし}えてくれる

12

「まずは、この『カタチ コトバ カラダ アタマ』の枠を利用して、さまざまな地図を作ってみれば、その意味がわかりやすくなるじゃろう」とおじいさん。

「地図？」 聞き返す僕。

「そうじゃとも。」

ふつうの『東 西 南 北』の枠を利用すれば、例えば、砂浜、公園、お店、学校、家… などのお互いの方向関係がわかる。それをもとに、それぞれを『東 西 南 北』の枠の上に配置すれば、地図が完成する。

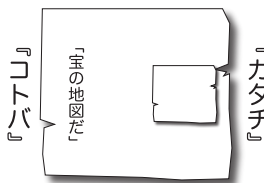
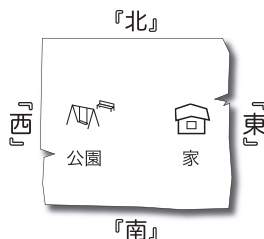
まあ、極端な話、例えば、西に公園、東に家を配置するだけでも、1枚の地図が完成する」

「——」

「一方、この『カタチ コトバ カラダ アタマ』の枠を利用すれば、いろーんなライフどうしのお互いの方向関係がわかる。それをもとに、それぞれのライフを『カタチ コトバ カラダ アタマ』の枠の上に配置すれば、やはり地図が完成するんじゃ」

「——。 ——ん？」

「例えば、これを見て『宝の地図だ』と言葉にする人生が、こっちの『コトバ』の方向にあるとすれば、これを見るままの人生は、こっちの『カタチ』の方向に



(言葉にする) (見るまま)

ある—— そんな地図を完成させることができる」

「——」 . . .

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 13 に続く

13

「地図と言っても、これは、ちょっとした“プチ・マップ”じゃがの」
「プチ・マップ——」

「プチといえども、やっぱり地図は便利じゃ。」

なぜなら、いったん地図が完成してしまえば、“今、自分は、どの方向にいるのか、どの方向に向かおうとしているのか”が一目瞭然となるのじゃからのお。

——まあ、それはふつうの地図の場合と同じじゃな」

「——」

「もちろん、もし、道路の案内標識や看板などの目印が充実しておったり、その土地に住んでいる方が近くにおられたりすれば、たとえ地図がなくとも、道に迷わずに目的地にたどり着けるじゃろう。じゃがのお、実際には、そういった目印や道先案内人に出会えないような場面も多々ありうる」

「そんなときは、地図が役立つんだね」

「そうじゃとも。」

しかも、実際には、未だ地図のない前人未踏の地を進むべき場面や、新しい領域を開拓すべき場面、あるいは、未だ誰も経験してい

ないような未来を切り開くべき場面もあるかもしれん。そのような未知の場面では、地図を限りなく新しく作れる、フレームやコンパスが大いに役立つじゃろう」

「——コンパス？」

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 14 に続く

14

『東 西 南 北』の枠がコンパスを提供できるように、『カタチ コトバ カラダ アタマ』の枠もコンパスを提供できるんじゃ。フレーム・フォー・オール・ライフから生まれたコンパスじゃから、コンパス・フォー・オール・ライフじゃな」とおじいさん。

「コンパス・フォー・オール・ライフ——」

「このコンパス・フォー・オール・ライフからでも、フレーム・フォー・オール・ライフからでも、ライフのあらゆる状況に合わせて、さまざまなプチ・マップを作ることができるじゃろう。

——まあ、いずれからにせよ、こうして完成したプチ・マップたちは、ライフの分岐点になる」

「ライフの分岐点——」

「むろん、『東 西 南 北』のコンパスの針が指し示す方向が進むべき方向であるとは限らないように——コンパス・フォー・オール・ライフの針が指し示す方向が進むべき方向であるとは限らない」

「——え？ じゃあ、何が進むべき方向を教えてくれるの？」

「“オール・ライフそのもの”が教えてくれるのじゃ。どこに向かうべきか、どの方向に進むのがよいかを教えてくれるのは、“オール・ライフそのもの”にほかならない」

「教えてくれるのは、オール・ライフそのもの——」

どこに向かうべきか

どの方向に進むのがよいか

を教えてくれるのは

“オール・ライフそのもの”

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 15 に続く

15

「さらには、このように“完成したプチ・マップをどのように活用するか”だけでなく、“どの完成したプチ・マップを選ぶのか”をおし教えてくれるのも、オール・ライフそのものじゃ」

「——え？」

「例えば、“おもしろい-つまらない”のプチ・マップを持っている人生と“安心-不安”のプチ・マップを持っている人生——

例えば、“ために生きている-おかげで生きている”のプチ・マップを持っている人生と“勝つ-負ける”のプチ・マップを持っている人生——

例えば、“愛している-憎んでいる”のプチ・マップを持っている人生と“好かれる-嫌われる”のプチ・マップを持っている人生——

例えば、“行動する-考える”のプチ・マップを持っている人生と“いい方に考える-悪い方に考える”のプチ・マップを持っている人生—— … それぞれの人生が大切にしているもの、目指しているものが根本的に違っているように感じないかい？」

「——そうだね。確かに、そう感じるよ」

「うむ。このように“どのプチ・マップを持っているか”は、その人の価値観や目標を大いに反映しておる。このことは、まさに“どのプチ・マップを選ぶのか”をおし教えてくれるのも、オール・ライフそのものであることを意味しておる」

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 16 に続く

どのプチ・マップを選ぶのか
おし
を教えてくれるのも
“オール・ライフそのもの”

16

「この世の大部分——ライフのすべては、パズルでもある。

迷路パズル、ジグソーパズル、クロスワードパズル、知恵の輪、点つなぎパズル、数独、ルービックキューブ…のようなパズル。

このライフのパズルを解くカギとしても、プチ・マップは役立つじゃろう」

「——」

「例えば、人生の迷路に、はまってしまった場面、人生の目標を再

確認したり再設定したりしたい場面においても、どんなプチ・マップがふさわしいのか、あるいは、そもそも、どのフレームが有効なのかを確認することが大いに役立つじゃろう」

「——え？ フレームは、1つだけじゃないの？」

「1つだけではない。

『カタチ コトバ カラダ アタマ』は、第1フレームじゃ。

フレーム・フォー・オール・ライフは、第1フレームから第7フレームまで、全部で7つあるんじゃ」

「ええ！？ 7つも！？」

「——少年よ。たった7つ！？ そう思う人生もありじゃよ。なぜなら—— おっと、それは、おまえさんに任せよう」

「——」 音楽フェード・アウト ♪心地よき日々 Comfortable Days

「じゃが、これだけは、はっきり言っておこう。

これは、ただの枠ではない。枠フォー・オール・ライフじゃ」

「——だから？」

「枠と7回繰り返し言ってみてごらん」

「——わくわくわくわくわくわくわく」

「あそれ♪ ワクワクワク、ワクワクワク、ワクワクワクワク
ワクワク♪ あそれ♪ ワクワクワク、ワクワクワク、ワクワク
クワクワクワク♪」 おじいさんは、三三七拍子のリズムで唱った。「ワクワクしてくるじゃろ？」

「——」 ……

「これは決して窮屈な枠ではない。ましてやくヨクヨクでもない。

視野や可能性を広げてくれるワクワク枠じゃ」

「ワクワク枠——」

「そうじゃ。しかも、このワクワク枠は、フレー！ フレー！ フレームでもある」

「——」 ……

「このフレー！ フレー！ フレームでもあるワクワク枠が7つあるんじゃ」

「——じゃさあ、第2のワクワク枠は何なの？」

「うん。はやる気持ちは、わからんでもない。

じゃが、その前に、まずは、この第1フレームとじっくり付き合ってみてごらん。それだけでも十分に楽しめるはずじゃ。

第2フレームについては、来年、話そう」

「来年？」

「そうじゃ、来年じゃ。この初夏の季節はな、この岬全体が1年で最も美しくなる季節なんじゃ。その季節に再び会うってのも、なかなか乙なもんじゃろ？ アッハッハッ！」

17

その晩、僕は、ベッドの上で横になって、ぼんやりと天井を眺めながら、その日のことを思い返していた。

あれを見て“宝の地図だ”と思うのが、ライフのあり方の1つ？

…… ——うーん、だから、何なのだろう？

ああ、宝探しをやってみたかったなあ。ガッカリだよ。

—ワクワク^{わく}枠？ —フレ—！ フレ—！ フレ—ム？

—フレーム・フォー・オール・ライフ？

—コンパス・フォー・オール・ライフ？

いったい何^{なん}なんだらう？

なんかへんだし— それに7つもあるっていうし—

・・・

—アレ？ 何^{なん}だったっけ？ 第^{だい}1フレームって—

・・・ —^{わす}れた？

どうでもよかったけれど、少しもったいないような^き気がしたの
で、ゆっくり^{おも}思い返^{かえ}してみることにした。

・・・

—あっ！ カッコー、カアー♪ カッコー、カアー♪

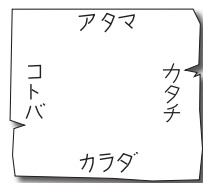
鳴^ないてる～♪ だ！

カコ、カコ、カコ… 『カタチ』と— 『コトバ』？

カア、カア、カア… 『カラダ』と— 『アタマ』？

まあ、一応^{いちおう}、^{わす}れないように^か書き留^とめておこうか—。

ベッドから起き上がった僕は、机^{つくえ}の上^{うへ}で、4つの方向^{ほうこう}を地図^{ちず}の裏^{うら}
に^{えんぴつ}鉛筆^かで書き込^こんだ。



手^てに持^もったそれを、しばらく、眺^{なが}めた。

おじいちゃん^{あたま}の頭^みを見る人生^{じんせい}、体^{からだ}を見る人生^み、それぞれが『アタ

マ』と『カラダ』の方向^{ほうこう}にあるってこと？ ……

—うーん。やっぱりヘンだよ。「これはいったい何^{なん}なんだい？」

「フレーム・フォー・オール・ライフから^う生まれた、コンパス・
フォー・オール・ライフで^うございますう～♪」

「ワッ—！！！」

僕は、とっさに^{ちず}地図^{ほう}を放^なり投^なげ、そのまま^{うへ}ベッドの上^とに飛^とび乗^のっ
た。ひらひらと床^{ゆか}に舞^まい降^おりる^{ちず}地図。

「か、か、紙^{かみ}から、—^{こえ}声^でが出^でた！？」

18

しばらく^{うへ}ベッドの上^{なん}にいたけれど、何^きにも聞^きこえず—

手^てに持^もったときに^{はな}だけ、話^{はな}せるってこと？

僕は、再び^{ふた}地図^{ちず}を手^てに持^もてみた。

「コンバンハで^{うへ}ございますう～♪」 その声^{こえ}は、とてもおおらかで、
ほが^{ほが}朗^{わか}らかで— 若い^{しんし}紳士^{しんし}のようでもあった。

「こ、こ、こんばんは」 —！！

コンパスの針^{はり}の絵^えが、浮^うかび上^あがってクルクル回^{まわ}っているのが
わかった。

「—」 —^{ゆめ}夢^{ゆめ}だ！ これは、ゼツタイ夢^{ゆめ}に^{ちが}いがない！

「—」 ^{ゆめ}夢^{ゆめ}ではないで^{うへ}ございますう～♪

「ワッー！！」・・・「——わ、わかるの！？ 心こころの中なかで話はなす
ことも」

「わかるでございますう〜♪」

「——」——ほんとう本当かよお？

「——」ほんとう本当でございますう〜♪

「——」！！！！

いそ急いでち地図ずをつくえ机うえの上に置いた。すると、コンパスの針はりの絵えのクルクルは、しだいに遅おそくなり—— ゆっくりと止とまった。

こえ声だに出だして話はなせるだけじゃなく、心こころの中なかでも話はなせるってこと？

19

けっきょく結局、いろいろ話はなしを聞きけるかもしれないと思おもった僕ぼくは、再さいど度、
ペーパー・コンパスをて手もに持もって見た。

「ほーい♪ 何か御用ごようでございましょうか〜？♪」かいてん回転している
コンパスの針はりの絵え——。

「僕ぼくの名前なまえは、さんぽです」

「君きみの名前なまえは、何なんですか？」

「わたくしの名前なまえは、コンパスでございますう〜♪」

「——」・・・「コ、コンパス、あ、あの、その、教おしえてほし
いんだ。岬みさきで会あった、おじいちゃんしやうたいの正体しやうたいは？」

「デアッタ？——」

「ほら、いたじゃん。岬みさきのああの場ばしよ所に、ほら、ほれ、あれ、親指おやゆびを

た立てて、前後ぜんごさせて、心こころ笑えんでいた——」

「イタジャン？ ココエンディタ？

——わからないでございますう〜♪」

「——え？」・・・「——じゃさあ、この『カタチ コトバ カ
ラダ アタマ』の棒わくを利用りようしたプチ・マップつくの作かたり方は？ どんな
作つり方かたがあるんだい？」

「プチ・マップつの作かたり方は、フレーム・オーナーこののお好このみでござい
ますう〜♪

「フレーム・オーナー？」

「フレームき記入にゆうしや者、および、フレーム・ホルダーこののことでございま
すう〜♪」

「——そ、そうなんだ」・・・「——ふわあああ〜」

なぜだか、大おおきなあくびでが出でた。

それから僕ぼくは、枕元まくらもとにペーパー・コンパスを置おきながら、再またび、
ベツドよこに横よこになった。

20

め目を覚さますと、外そとは、もうすでに明あかるくなっていた。

もう朝あさかあ——。

ベツドで上半身じやうはんしんを起おこした僕ぼくは、何なんかの気配けはいを感じかんじた。

その方ほうこう向みを見ると——

「ええ!？」

そこには、床から数十センチの空中にフワフワと浮かんでいる

ペーパー・コンパス、いや、コンパスの姿があった。

それも、僕の体より一回りほど大きくなって――。

「おはようございますですう～♪」 コンパスの朗らかなあいさつ。

「お、おはよう」 目をぱちくりしながらあいさつを返した。

僕が床の上に降り立つと、コンパスは一部を傾け、チョイチョイと床をノックした。

・・・ ―え？

戸惑っていると、コンパスは、再び床をノックしながら言った。

「よろしければ、どうぞでございませう～♪」

「――えっ？ 乗ってみてもいいの？」

「そうでございませうともお～♪」

コンパスの上に、おそろおそろ四つんばいになってみた。

コンパスの厚みが増しているおかげで、破ける心配もなさそうだった。それから、コンパスの上はじを軽くつかんでみると――

「しっかり、つかまっているのでございませう～♪」 コンパスは、そう言うやいなや、僕を乗せたまま、2階の窓から、ふわっと外へ飛び出て行ったんだ。

「ウ～ワッ！！」

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky 21 に続く

21

家々が下を流れている――。

「す、すごいよ！ 空を飛べるなんて！」

「ありがとうございますですう～♪」 そう返事したコンパスは、今度は、空高く舞い上がり始めた。上へ、上へ―― 家々や道路や森や川が、見る見る遠ざかっているのがわかった。

しばらくすると、スピードが緩み、静止した。

そこは、地元全体をゆうに一望できるほどの上空だった。

その海岸線の形は、地図で見ていたのとほとんど同じだった。

前方を見やると―― これまで見たのとは比較にならないほど、はつきり丸みを帯びている水平線が目に入った。太陽の光があたっている海面は、表現できない美しきでキラキラ輝いていて――。

「行ってみたい場所は、ございませんでしょうか～♪」

「え？ そうだなあ――。 ―とりあえず、あの岬？」

「はい、かしこまりましたでございませう～♪」 コンパスは、そう言うと、スムーズな滑空を始めた。

心地よい風が全身をなでている――。

「ああ、気持ちいいや！」

岬へと向かうあの上り坂の上空を悠々と飛び越え――

「ヤッホー！ ラクチン、ラクチン！」

例の下り勾配にさしかかる頃、そのポイントを見やると、キラリと目に入った。

「あっ、おじいちゃんだ！ また、あそこで寝てらあ。これじゃ、

あさね
朝寝だよ。

——お〜い！！」 お腹の底から声を張り上げてみた。

そうして、コンパスがそのキラリの上空にたどり着こうとする、まさにその瞬間、僕の目は大きく見開いた。

「え！？」

そのキラリの正体は、朝の陽光が反射して輝く——

——宝箱！？

音楽フェード・アウト ♪ Soaring Up Into The Sky

22

しかし、コンパスは、そのままスーッと素通りした。

「わあ！ ストップ！ ストップ！」

コンパスは、何の反応も返さず、海の上空を進み続けた。

「宝だ！ タ、カ、ラ！ あそこに、でっかな宝箱があったぞ！」

それでも、コンパスは、そのままグングン進み続け—— だんだんと海面スレスレにまで近づいた。

かと思うと、次は、グイーンと急上昇を始めた。

「うわあああ…！ ——どうしたんだあ！？ 大丈夫かあ！？」

コンパスは、全くと構いなしだった。それからしばらくの間、ジグザグしたり、クルクル回転したり—— コンパスは、上下左右にメチャクチャな方向転換を繰り返した。

両手と両腕がジワジワ疲れてきて—— コンパスにしがみつ

ているのがやっとなってきた。

「まずい—— 力が入らなくなってきたよ」

そのとき何やら聞こえ始めた。 よく耳をすますと——

「…ルモウネ、ルモウネ、ルモウネ…」

「だから、寝なくていいっていうの！ こら、寝るなあ！ 寝るなあ！ …」

「…モウネル、モウネル…」

しばらくすると、コンパスは、推進力と浮揚力の両方を完全に失い、僕と一緒に海へと真っ逆さまに落下し始めた。

「うわあああああああああ…！！」

——ゴトツ。

ベッドから床へ、ずり落ちて目覚めた。

しばし呆然——。

手と腕の疲れは、全く感じなかった。

ああ、夢でよかった——。

心底、そう思った。

床にひざまずいたまま、すっかり明るくなっている窓の外をしばらくボーッと眺めた。

ふと見ると、地図も床の上に落ちていることに気づいた。

… —あれ？

どこまでが現実？ どこからが夢？

23

地図の裏には、しっかり、『カタチ コトバ カラダ アタマ』の文字が残っていた。

ってことは、少なくとも、あそこまでは現実だ。うん。

・・・ —あっ！ 夢と現実って、プチ・マップの作り方と関係がありそうじゃないか？

・・・ —あっ！ もしかして—

新しいプチ・マップの作り方がひらめいた僕は、コンパスの存在が夢か現実かハラハラしながら地図を手に持ち、話しかけてみた。

「おーい、わかる？」

「—あっ、ほいほうい〜♪」 コンパスの応答があった。

ああ、よかった。こっちも現実だ！ 「—おはよう！」

「オハヨウでございますう〜♪」

「あれ、わかったかもしれない。新しいプチ・マップの作り方」

「ほういー？♪」

「えっと、例えば、眠っている間に夢を見る—想像の中で見たり想像の中で聞いたりする、つまり、頭の中だけでとらえる人生が

『アタマ』の方向にあるとするだろ？」

「ほういー♪」

「すると、例えば、現実をとらえる—実際に目で見たり実際に耳で聞いたり実際に手でふれたりする、つまり、体を通じてとらえる人生が『カラダ』の方向にあるんだよ

「ほいほういー♪」

『アタマ』

夢を見る
(頭の中だけでとらえる)

現実をとらえる
(体を通じてとらえる)

『カラダ』

『アタマ』

頭の中で会話する
(心の中で会話する)

声を出して会話する

『カラダ』

「それから、例えば、心の中で会話する—頭の中で会話する人生が『アタマ』の方向にあるとすれば、声を出して会話する人生が『カラダ』の方向にあるよ」

「ほいほういー♪」

「もちろん、頭の中だけでとらえることは、ほかにもあるよ。

例えば、アイデアがひらめくことだったり、想像上で考えを進めることだったり、ある出来事を思い出すことだったり…。

どれも、頭の中に何かを思い浮かべることをベースにしているから、同じように『アタマ』の方向にあるんだよ」

「—ふわあああ〜♪」 コンパスが大きなあくびをした。

「—大丈夫？」

「ダイジョウブでございますう〜♪ なんだか、とても眠たくてしかたないでございますう〜♪」

「あ、ごめんごめん。そうだったんだね。では、のちほどゆっくり。—お休み」

「ふわあああ〜♪ オヤスミでございますう〜♪」

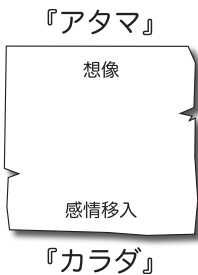
24

コンパスを机の上に置いた僕は、そのままイスに座り、窓の外を眺めた。

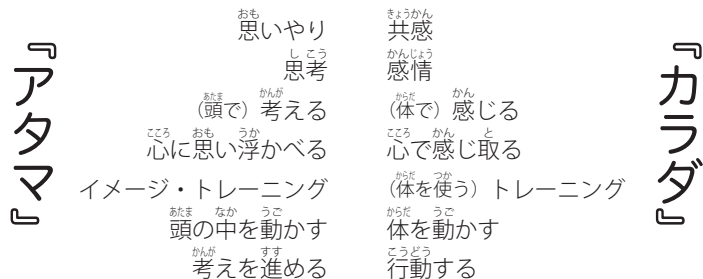
「ふわあああ〜」 なんだか、こっちまで眠たくなってきたよ—。

・・・ —ん？ あ、そうだ！

コンパスの気持ち^{きもち}を、こちらの体^{からだ}をふるわせてキャッチする、感情移入^{かんじょういじゅう じんせい}の人生が『カラダ』の方向^{ほうこう}にあるとすれば—— コンパスの気持ち^{きもち}を頭^{あたま}の中で思い描く^{おも えが}、想像^{そうぞう}の人生は、相対的^{じんせい}に『アタマ』の方向^{ほうこう}にあるんじゃないか？



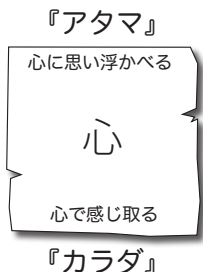
その気づき^きは、眠気^{ねむけ}を吹き飛ばし^ふ、新しい^{あたら}プチ・マップの作り方^{つく かた}を次々^{つぎつぎ}と見つけさせてくれた。



・・・

心^{こころ}は、『アタマ』と『カラダ』の両方向^{りょうほうこう}と関連^{かんれん}しているだろう。

心^{こころ}は、広い意味^{ひろい いみ}を持つ^もだろう。



そうして、思い^{おも}のほか、プチ・マップ作り^{つく}に惹か^ひれるようになったんだ。

25

夏休み^{なつやす}—— とある屋下^{ひるさ}がりにランプベリーとコンパス^{いっしょ}と一緒に海^{うみ}辺^べに来ていたときには、『カタチ コトバ』の方向^{ほうこう}のプチ・マップ作り^{つく}について思い^{おも}めぐらせていた。

砂浜^{すなはま}に腰^{こし}を下^おろしながら——。

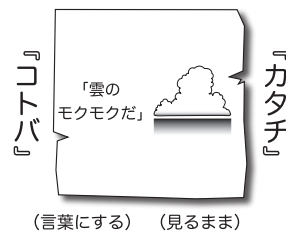
ランプベリーは砂浜^{すなはま}を自由^{じゆう}に駆^かけ回^{まわ}っていた。

ザブーン、ザザザシュー …

心地^{こころ}よい波^{なみ}の音^{おと}が響^{ひび}き渡^{わた}っていた。

水平線^{すいいせん}の上^{うへ}には、白い雲^{くも}がモコモコしているのが見えた。

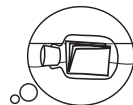
「そうすると、例^{たと}えば、アレ^みを見る^みままの人生^{じんせい}が『カタチ』の方向^{ほうこう}にあるとすれば、『雲^{くも}のモクモクだ』と言葉^{ことば}にする人生^{じんせい}は『コトバ』の方向^{ほうこう}にあるってことかあ——」



「ほうい〜♪」

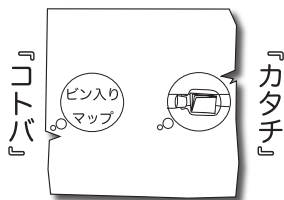
「そう言^いえば—— ちょうど、あ^{あた}の辺^{きみ}りで君^{きみ}のことを初^{はじ}めて見^みつけたんだっけ」

あ^あのとき^{とき}の様子^{ようす}を頭^{あたま}の中^{なか}に思い^{おも}浮か^うべてみた。



—あっ、そうだ！

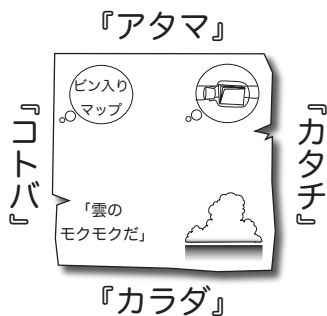
例えば、頭の中のイメージを見るままの人生が『カタチ』の方向にあるとすれば—— “ピン入りマップ” とかと頭の中で言葉にする人生は『コトバ』の方向にあるってことも成り立つよ。



(言葉にする) (見るまま)

—ほいほうい〜♪

「うん。そうすると—— これらは、1つの地図にまとめることができるよ」



「ほいほういほうい〜♪」

26

「でもさあ、“だから何？”って感じだよ」と僕。

「ダカラ—— 何でございましょう〜？♪」

「そうさ」

ちょうどそのとき、ランプベリーが駆け寄り、じゃれついてきた。ランプベリーの首から胸の辺りをさすってあげた。すると、ランプベリーは仰向けになり—— 気持ちよさそうに、じっとしていた。

ランプベリーのぬくもりが手に伝わるのを感じた。

「アハッ。例えば、こんなふうにして感じるままの人生が『カタチ』の方向にあるとすれば、“ランプベリーのぬくもり”と言葉にする人生が『コトバ』の方向にあるってことも言えるよね」



(言葉にする) (感じるまま)

「ランプベリーというお名前なのですね〜♪」

「そうだよ—— ふと空を見ると、シュークリームの形にそっくりな雲が浮かんでいた。

「ああ、あれは、完璧にシュークリームだね。ああ、うまそう」
グウー… お腹が鳴った。——ああ、お腹空いた。・・・

「—あっ、そうだ！ ひらめいた！」

「ほうい？♪」

「この『カタチ』の方向にある人生は、何かを見るまま、何かにふれるままの人生だけに限らないと思うんだ。だから、例えば、“お腹空いた”と言葉にする前の、体の中のこの感じをただ感じるままの人生も『カタチ』の方向にあっていいんだよ。きっと——」



(言葉にする) (感じるまま)

「ほーうほうほう〜♪」

「そういう意味で、“おいしい、眠い、気持ちいい、心地よい波の音、座っている、ぬくもり、白い雲が浮かんでいる、お腹空いた…”は、どれも同じなのさ。これらはすべて、言葉にするライフとして『コトバ』の方向に置いて、言葉にする前のさまざまな感じをただ感じるままのライフが『カタチ』の方向に置けると対になっているのさ。きっと——。



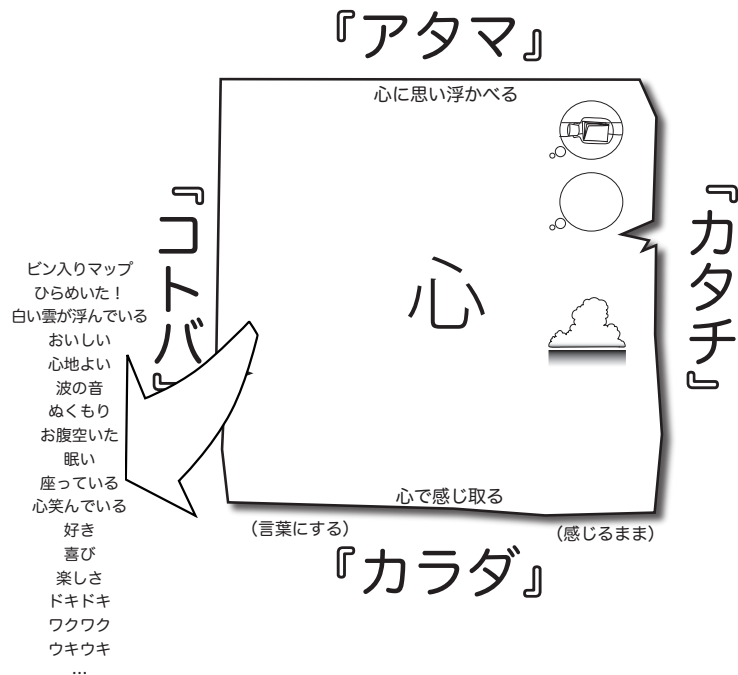
(言葉にする) (感じるまま)

そうすると、心の意味は、もっと広がることになる。

想像やひらめきなどの『アタマ』の方向の心が『カタチ』の方向と『コトバ』の方向に意味が広がるように——

視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚、内蔵感覚、運動感覚…などの感覚や、喜び、楽しみ、ワクワク、ウキウキ、ドキドキ、好き、悲しみ、クヨクヨ、ムカムカ、モンモン…などの感情といった『カラダ』の方向の心も、『コトバ』の方向と『カタチ』の方向に意味が広がるのさ。

つまり、まとめれば、次のようになる」



「ほういほういほうい〜♪」

「——」・・・「——あ、やっぱり、お腹空いたなあ。家に帰って何か食べよう」

27

冷蔵庫の中で冷えていたジューシーな、ももを1つ食べ終えて満足した僕は、ベッドの上で横になると、ぼんやりと天井を眺めた。

—ああ、なんだか眠たいよ。

—少し眠ろう。

まぶたを閉じた。

・・・ —あっ、またまた、ひらめいた！？

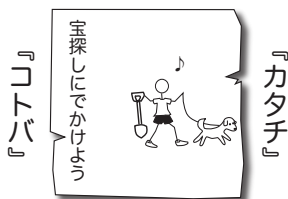
まぶたを開いた。

“眠ろう、何かを食べよう、宝探しにでかけよう…”のように言葉にするだけで、まだ実現していない言葉のままのライフは、『コトバ』の方向にある。

それに対して、『カタチ』の方向にあるライフは—

・・・ —そうだよ！

実際に眠るとか、実際に何かを食べるとか、実際に宝探しに出かけるとか… うん。つまり、形にするライフが『カタチ』の方向にあるんだ！

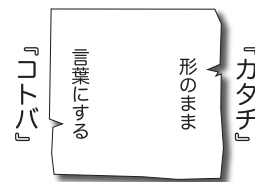


(言葉のまま) (形にする)

28

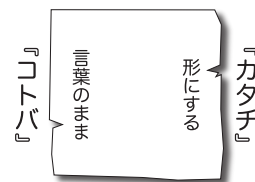
海辺では—

言葉にするライフが『コトバ』の方向にあるとすれば、形のままのライフが『カタチ』の方向にあるってことを考えた。



一方、家に帰ってからは—

言葉のままのライフが『コトバ』の方向にあるとすれば、形にするライフが『カタチ』の方向にあるってことを考えたんだ。



—ライフって、何？

“ライフは宝探しだ。ライフは航海だ。

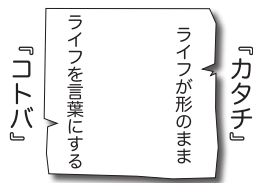
ライフはスポーツだ。ライフは音楽だ。

ライフは演劇だ。ライフはフルーツ育てだ。

…”

いろいろある—。

うん。ライフを言葉にするライフが『コトバ』の方向にあるとすれば、ライフが形のままライフは『カタチ』の方向にあるだろう。



—どんなライフにしよう？

“楽しいライフにしよう。ワクワクするライフにしよう。

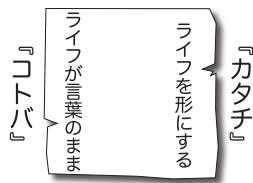
あったかいライフにしよう。彩り豊かなライフにしよう。

心地いいライフにしよう。フルーツフルなライフにしよう。

...”

いろいろある—。

うん。ライフが言葉のままライフが『コトバ』の方向にあるとすれば、ライフを形にするライフは『カタチ』の方向にあるだろう。



29

まもなく夏が終わり、それから秋が過ぎ、さらに冬が過ぎると、雪解けの季節になった。

音楽イン ♪春 Spring

春の陽射しが、冬の間野原に降り積もった雪を片隅に追いやり、小空花が可憐に咲き始めていた。

新鮮な雪解け水によって、小川の勢いがいくらか増していた。

花の咲き始めた木の枝では、小鳥たちが明るい歌を奏で始めていた。

...

ところが、そのような心浮き立つ季節に、地図の裏に書き入っていた文字やコンパスの針の絵は、いつの間にか、すっかり消え、コンパスと全く話せなくなっていた。

—ああ、あいさつできなかったなあ。

なんだかさびしいや。

鉛筆を取った僕は、再び『カラダ アタマ カタチ コトバ』を書き込もうとした。 —が、やめた。

これは、きっと、新しい第2フレームをおじいちゃんに教えてもらうべきだってことなのだろう。

そう思ったからだ。

それに、自分で見つけたプチ・マップの作り方をおじいさんに披露して、彼をアッと驚かせたかったし—

結局、決めたんだ。

—おじいちゃんに、また会いに行こう。

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

30

音楽イン ♪夏 Summer

ランプベリーを連れて岬へ向かって出発したのは、すがすがしい
 青天が広がる、初夏らしい日だった。

今回は、少し荷物があったけれど、ペース配分をうまく考えなが
 ら坂を上っていたので、余裕があった。

途中、周囲をよく見渡すと、樹々が豊かに生い茂っているのがわ
 かった。逆光の中、あわく透けて見える木の葉たちの明るい緑が、
 そよ風によって、さやさやとゆらいでいた。

日光で透けた葉っぱって、こんなふうに見えるんだ——。

ふと、荷物を持つ手を替えた。

坂を上りきると、例の、なだらかな下り勾配を見おろした。

その一面には、若草が生い茂っていて—— 白や黄やピンクの花
 々が咲き、モンシロチョウが何匹も舞っていた。

——アレ？ こんなに、きれいなところだったっけ？

その先に視線を向けると、例の場所に、例のキラリが見えた。

「おっ、いるいる。よし——」 ランプベリーのリードをはずした。

「行け、ランプベリー！」 ランプベリーは、勢いよく坂を下ると、
 しっぽを振りながら、おじいさんにじゃれつき、——やっぱりおじ
 いさんの顔をペロペロとなめた。

「アッハッハッ！ くすぐったい。こら、やめろ！ アッハッハッ！」

「おーい！ 元気に生き〜ているかあ〜い！？ ♪」 僕が近づきなが
 ら呼びかけると——

「おーう！ 元気に生き〜とるともお〜！ ♪」 おじいさんは応えた。

音楽 ♪夏 Summer 31 に続く

31

丸い石を手にとりながら、ゆっくりと起き上がったおじいさんの
 表情は、やわらかかった。

「おう、よう来た！」とおじいさん。

「おう、よう来たぞ！ おお、その丸い石、相変わらず、よく輝い
 ているねえ」 思わず、丸い石の輝きを手でふれてみた。

「じゃろじゃろ？ こいつは、わが自慢の相棒でもある。アッハッ
 ハッ！」

「アハハッ！」 一緒に笑った僕は、袋をおじいさんに差し出しな
 がら言った。「これ—— おみやげ」

「お？ なんじゃ？」 おじいさんは、そう尋ねた。

「——トマトだよ。親たちが趣味でやっている家庭菜園で採れたん
 だ。持って行ってあげなさいって——」

袋の中をのぞき込むおじいさん。「おお、新鮮で立派なトマト
 じゃ。——ありがとうよ。親御さんたちは、トマト作りの名人じゃ
 のお」 そう言いながら、うれしそうに袋を受けとるおじいさん。

「——ところで、この袋もなかなか立派じゃのお。あとで返そう」

「え？ ——いいよ、いいよ。どうせ、なんかの使い古しだし」

「いやいや、そうはいかん。長持ちする、よい買い物袋などにも使
 えそうじゃよ。」

わしが持っておっても、宝の持ち腐れになるだけじゃ」

「——」・・・「——うん。わかった。」

——アハッ！ “リリサイクル”だね？ あっ、“リリユース”？」

「——あっと、たった今気づいたんじやが、ほれ、ここに、ちゃんと名前も書いておる。アッハッハッ！」

「アハハッ！ 僕も今初めて気づいたよ」

結局、おじいさんは、その言葉どおり、のちに、わざわざ、いったん帰宅してから、その袋を返してくれたんだ。

新鮮ないちごと両親へのお礼の手紙を添えて——。

音楽 ♪夏 Summer 32 に続く

32

おじいさんとランプベリーと僕は、水平線を遠くに眺めつつ、並んで腰を下ろしていた。沖合いで、1艘の船が、ゆっくり移動しているのが見えた。

「この1年どうじゃった？ 元気にしておったか？」とおじいさん。

「ああ、元気！ 元気！ ——おじいちゃんの方は？」

「ああ、こっちも元気じゃった——」

それから僕は、第1フレーム『カタチ コトバ カラダ アタマ』を通じて、この1年で考えたこと、感じたこと、やったことを、いろいろ語って聞かせた。

“エヘン、どうだ、まいったか！”とでも言いたげに——。

「おお、なかなかやるのお。さすがじゃ」感心するおじいさん。

「さすがじゃろ？ ちょろいもんよ」

「うむ。少年よ—— そうやって完成したプチ・マップたちは、かけがえのない、今のおまえさんのものじゃ」

「——。 ——え？ どういうこと？」

「これからの、おまえさんの成長や変化に応じて、フレームの活用法や完成するプチ・マップが成熟しうるとのことじゃよ」

「——うん」

音楽 ♪夏 Summer 33 に続く

成長や変化に応じて

フレームの活用法や

完成するプチ・マップが

成熟しうる

33

ランプベリーは、そばで昼寝を始めていた。

「ライフが変わること—— それ自体は、決して恥ずかしいことじゃない。それは、ある意味、生きている証の1つなのじゃからのお」

「生きているアカシ——」

そのときは、その言葉の意味が、さっぱりわからなかった。

「——それじゃあ、今のおじいちゃんにとってのフレームの活用法とか、プチ・マップの作り方は？ こう、年の効っていうか、年配者ならではっていうか、——そういうの？」

「ん？ そいつは、おまえさんの将来の“あとのお楽しみ”というのが1番よいように思うんじゃが、——どうじゃろう？」

「——。あとのお楽しみ——」

「そうじゃとも。——うむ。では、そろそろ第2フレームを紹介しようかの」

「よっ、待ってました！」

「例の地図を持ってきたかな？」

「ああ、もちろん」 おじいさんに地図を手渡した。

「——あっ！ 思い出した！」

「ん？ 何をじゃ？」

「あれ、ほれ、それ、地図が、第1フレームから生まれたペーパー・コンパスが、——しゃべった」

おじいさんは、パッと心笑んだ。「そりゃあ、ラッキーでありがたいことじゃ。よかった、よかった——」 満足そうな笑みを浮かべながら、話すおじいさん。

そう言われてみれば、何となく、そう思えてきた。

おじいさんは、地図をゆつくりと裏返した。

「うむ、では、行くぞ？ 第2フレーム——」

「ああ、さあ来い！」

音楽終了 ♪夏 Summer

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For All Life

となりのコンパス①

第1フレーム

『カタチ コトバ カラダ アタマ』

【完】